

「日本3.0」

Vol.27

これからの時代も本が生き残る理由

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

これからの時代は、ますますスマホが中心になることは必至ですが、紙はそのまま減り続けるのでしょうか？
そんな問いに、私の中である程度答えが出てきました。簡単に言うと、「紙の中でも、新聞と雑誌はスマホに侵食されて減り続ける。ただし、紙の本はスマホと共存する」ということです。
その理由は3つあります。
1つ目に、本はスマホと対極のメディアであるということです。
スマホはコンテンツが短く、画面が小さい。短いニュース記事や、メッセー

ジをやりとりするのには向いています
が、じっくり読み込んだり、深く考えたりするにはあまり向いていません。
とにかく気が散りやすいのです。

それに対して、本はコンテンツが長く、インターフェイスが広い。集中して物語や論考にのめり込み、著者とパトチャルに対話することが出来ます。とくに、ゆっくり時間がとりやすい休日などは、スマホより本に親しんだほうが豊かな時間を過ごしやすい。
2つ目は、利便性です。

もちろん、検索や、大量の本の持ち歩きや、自宅の書棚スペース削減を考えると、スマホやKindleで電子書籍を楽しむのは便利です。しかし、そんなに大量の本を持ち歩きたい人は稀ですし、書棚で家のスペースが圧迫されるほどの読書家も稀でしょう。

すなわち、大半の人にとっては、どこにも持ち歩いて、一覧性があったて、書き込みもしやすくて、デザイン性も優れている、モノとしての紙の本は便利なのです。しかも、紙の本のほうが、電子よりも内容が記憶に残りやすいという研究結果もあります。知識の吸収

という点でも、利便性が高いのです。
3つ目は、なんとも言えぬ、モノとしての魅力です。

紙の本には、単なる理屈を超えた、思い出やインテリアやアートとしての愛おしさがあります。古くなると単純に価値が落ちるわけでもなく、古本だからその味も出てきます。骨董品を集めるようなエクスタシーがあるので。一方、電子書籍にはどうも心が動かされないのです（「佐々木さんはつきり電子ばかりかと思っただ」とよく言われるのですが…）。

これからのスマホと紙の本は、競合関係とはならず、むしろ補完関係となるはず。「スマホ×本」を組み合わせてうまく活用できる人こそが、新時代のリーダーとなっていくはず。

ノスタルジーにひたっているわけではなく、私は紙の本と、紙の本のワンダーランドである書店という空間に大きな可能性を感じています。今後も本大好き人間として、本の持つポテンシャルを探っていききたいと思えます。



Profile

NewsPicks COO (チーフコンテンツオフィサー)
1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月からソーシャル経済メディア「NewsPicks」の編集長を務めた。2018年4月より現職。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」「日本3.0」がある